書　評

原克昭著
『中世日本紀論考――註釈の思想史』
（法藏館・二〇一二年）

林　東洋

一

本学会大会において、パネルセッション「『麗気記』にみる中世」が開催されたのは平成十二（二〇〇〇）年のことである。それから十有余年が経過し、中世神道や隣接諸分野の研究にも大きな進展がみられるようになった。写本資料の翻刻・注釈の作業も漸く進みつつあり、それにもとづく研究の成果も書肆に並ぶようになってきた。ごく近年に出版されたものに限っても、伊藤聡『中世天照大神信仰の研究』（法藏館、二〇一一年）、舩田淳一『神仏と儀礼の中世』（同、二〇一一年）、鈴木英之『中世学僧と神道――了誉聖冏の学問と思想』（勉誠出版、二〇一二年）などが挙げられる。これらの研究が扱う資料のうち、『日本書紀』あるいは『麗気記』の神代紀への註釈文献は少なからぬ割合を占める。原克昭による本著は、その神代紀註釈の中世思想史における位相を明らかにすることを主たる目的とした研究である。本研究の射程は、単に中世神道研究の範疇に限定されるものではない。『日本書紀』神代巻が様々な思想・文学の発想の源泉となってきたことを考慮すれば、その神代巻が中世という時代においてどのように註釈されたのかを論じることは、とりもなおさず中世人が共有した知識の体系、知の枠組みを理解しようとすることに直結するといえるだろう。

中世の『日本書紀』註釈群を〈中世日本紀〉という学術概念で総称することは、既に学界においては定着している。この概念はどのような内容をもち、どれほどの外延を持つのであろうか。著者は、現代の「神話」イメージは近代的合理主義のもとで創出され定着した、近代の産物であるという。「神話」は古代から現代に至るまで、時代の思潮を巧みに投影させながら存在してきたのである。とりわけ中世（院政期～鎌倉・室町期）には、中世神道文献のみならず、記紀の註釈文献、寺社縁起・本地物語・歌学書・説話・唱導文芸などの分野において、神話の変容と新生が起こってゆく。そのような状況を背景に、『日本書紀』の引用・註釈と、新たなる言説を生成した解釈活動とを総体的に捉える学術的な視座が〈中世日本紀〉なのである。

〈中世日本紀〉研究は一九七〇年代の伊藤正義の論考に始まり、八〇年代以降は日本思想史学・国文学・歴史学・美術史学などの諸分野を横断する形で数多の成果が生み出された。著者

は、研究者間では一般的になったこの学術概念は既に相対化されるべき段階に来ている、と考える。方法としてはあくまでも『日本書紀』『麗気記』とその註釈文献の実証的分析に依りながらも、〈中世日本紀〉研究がもつ有効性を再確認し、またその限界をも問い質そうとするところに著者の炯眼が光る。

本著はある特定の文献や個人の思想について論じたものではなく、著者も「作品論や人物論を志向したものではない」ことは明言している。個々の文献や思想家について論じるという方法では扱いきれない外延をもつのが〈中世日本紀〉なのである。著者は膨大な文献とそこに示される言説とを横断的に調査しながら、神代紀の註釈をめぐる実態相や、その営為の前提となる学問環境をも考察の対象としながら、中世特有の論理展開や、その基底をなす思想構造を明らかにしようとするのである。

本書の構成は左記のとおりである（ただし、各章における小節の題は省略した）。

緒言――〈中世日本紀〉研究をめぐる視座と可能性

第Ⅰ部　〈中世日本紀〉研究史の再構築――学説考証篇

序　章　学説史・研究史に関する課題

第一章　『日本書紀』註釈・研究史

第二章　『麗気記』註釈・研究史

第Ⅱ部　神代紀註釈の形成――文献考証篇

第一編　神代紀註釈文献と諸本論――室町期の学匠を中心として

序　章　神代紀註釈文献と諸本論に関する課題

第一章　良遍による神代紀註釈とその諸本――天台学匠の神代紀研究

第二章　了誉聖冏による神代紀註釈とその諸本――浄土学匠の神代紀研究

第二編　神代紀の講釈と抄物

序　章　神代紀の講釈と抄物に関する課題

第一章　『日本書紀』講釈史・点綴――抄物の形成と再生

第二章　『日本書紀』進講史・断章――「日本紀の家」盛衰記

第Ⅲ部　神代紀をめぐる言説の生成と展開――言説考証篇

第一編　神典にまつわる構想力

序　章　中世の神典認識に関する課題

第一章　「日本紀」をとりまく構想力――〈嵯峨天皇日本紀再治説〉考

第二章　「麗気記」にたゆたう構想力――註釈の中で屹立する神典

第三章　〝焚書〟された「日本紀」の光芒――〈呉太伯後裔説〉続貂

第四章　〈佚文〉と〈仮託〉をめぐる構想力――輯佚・剳記

第二編　宝鉾神話の変容と展開

序　章　宝鈕神話の変容と展開に関する課題
第一章　宝鈕の所在をめぐって――〈熱田源太夫説話〉
第二章　宝鈕の行方をめぐって――〈新羅沙門道行譚〉
第Ⅳ部　中世神道思想史への射程――思想考証篇
第一編　註釈学と神道論・仏教論
序　章　註釈学と神道論・仏教論に関する課題
第一章　神代紀註釈と神道論の形成――良遍『日本書紀聞書』劈頭条・試解
第二章　仏神論をめぐる註釈史――〈三神説〉再考
第二編　註釈学と時間論・年代論
序　章　註釈学と時間論・年代論に関する課題
第一章　神代紀をめぐる年代論的構想
第二章　年代論と命期説・術数学――『周易命期経』解析から室町期思想文化圏におよぶ
結語／附篇〈中世日本紀〉関連年譜／あとがき／索引

二

第Ⅰ～第Ⅳ部の各章はそれぞれ小節に分かれているが、全ての章・節を詳細に評する紙幅もないので、以下、ごく掻い摘んで内容を紹介することにする（文中の括弧類、すなわち〈　〉や「　」は、著者の使用例に極力近づけた）。

第Ⅰ部は、『日本書紀』『麗気記』の神代紀とその註釈に関する従来の学説を整理しながら研究史を再構築する試みである。第一章では、従来の『日本書紀』研究が、仏教史に対抗しうる〈神道史〉の構築という視点からのものであったことが指摘される。中世文学研究者が思想史分野へ参入したことにより、既成の〈神道史〉に根差した学説や固定観念がゆらぎ、中世の『日本書紀』註釈に光が当てられるようになった。それまではごく特殊な領域とされてきた中世神道の言説が、広く中世研究のなかで相対化されるようになり、ここに〈中世日本紀〉という研究概念が成立したのである。第二章では、現在確認される『麗気記』諸註釈を整理し、おおまかに系統づけたうえで、これら諸本が十分に翻刻すらされていない現状を憂う。著者は、さらなる『麗気記』註釈の発掘と文献学的考証をすすめて、中世文献としての資料的位置づけを図るべきだと主張する。また、『麗気記』およびその註釈を取り扱ううえで、安易に現代の文脈に置換して理解することの弊を述べ、〈註釈〉を原典に付随するものとみる前に、中世の文脈のなかで成立した一箇の文献資料として理解すべきことを強調する。

第Ⅱ部は二編構成となっている。第一編では、中世に形成された神代紀註釈の諸本を文献資料学的な見地から検討していく。その作業を基礎としながら、現代の〝つけられた〟註釈と中世の〝つくられた〟註釈の位相の差も浮き彫りにしてゆこうとする。まず第一章では、比叡山高照院の阿吽房良遍（生没年未詳）の著作を整理する。『日本書紀聞書』『麗気聞書（麗気記抄）』『神代巻私見聞』について、それぞれ諸本の伝領過程を考証し

ていく。良遍の著作は講述・伝授による《聞書》《見聞》の体裁を取るものが多い。そのため所載の記事が本当に良遍自身の説であるかどうかが問題となってくるが、著者は〈加証奥書〉とそれにつらなる筆録者の識語、また問答体形式にみる叙述のあり方を論拠に、「文責はその聴聞・筆録者にあるが、あくまで主体は講述者の良遍にあると断案することも可能」と述べる。さらに阿部泰郎の説を承けつつ、良遍が依拠した『日本書紀』神代巻本文は、卜部家系統に属する写本であったことを述べる。第二章では、浄土宗第七祖の学匠であり、鎮西派（白幡派）中興の祖と仰がれた了誉聖冏（一三四一～一四二〇）による註釈が考察の対象となる。『日本書紀私鈔（幷人王百代具名記）』諸本の伝領過程、また『麗気記私鈔』『麗気記拾遺鈔』『麗気記神図画私鈔』の相関関係と諸本の伝存形態について考証する。さらに聖冏の百王思想が、（『野馬台詩』の語を借りれば）「百王流れ畢ごとく竭き」た〈当時〉の時代思潮を反映したものであることが示される。その聖冏の註釈を後代の者が享受・継承するなかで、註釈文献はさらに多様に形を変えて再利用・再生されていくのである。

第Ⅱ部第二編では、卜部氏による『日本書紀』神代巻の伝授・講釈・進講の実態を諸記録の記事を検討することで明らかにし、その講義録・聞書類が抄物として伝えられてきたことについて考察する。第一章では、〈伝授〉と〈講釈〉の諸相を検証する。前者は伝授者と伝受者の一対一の関係において成立するもので、「日本紀の家」たる卜部氏の秘説と家学が形成される場であった。一方、後者は複数者を相手にした秘説の披露と家学公認の場であり、この〈伝授〉と〈講釈〉は表裏の関係であったといえる。本章では数々の典拠に基づいて、『日本書紀』講釈の年記、講釈・伝授者、発起人・伝受者、場所等の詳細な一覧が提示される。さらに講釈の講義録・聞書としての抄物の成立について、『神代巻釈書（神道釈抄）』と『日本書紀註鈔』『神代秘抄』の事例が調査されている。中世に成立した抄物は、現場の講釈を裏付ける一方で、後代に手を加えられつつ伝写され、註釈文献として再生していったのである。第二章では、『日本書紀』の禁中での進講について、卜部氏（平野家・吉田家）の盛衰を絡めて論じられる。兼倶および兼右の進講のあり方を、それぞれ日時・陪聴者・進講の状況などの諸記録を精査することで描き出していく。また、当主でありながら出奔した兼満の学問や、江戸初期の兼見・神龍院梵舜の進講までを視野に入れている。

第Ⅲ部では、神代紀註釈を通して生成された諸説を検討する。第一編では、中世という時代層のなかで「日本紀」「麗気記」がどのように認識されていたかを確認する。第一章では、もとは仮名書きであった「日本紀」が、嵯峨天皇の勅により真名（漢字）に再編集されたという〈嵯峨天皇日本紀再治説〉について考察される。この〈再治説〉が嵯峨天皇の時代に設定されたのは、先行する〈両部神道濫觴説〉がきっかけになっている

ものと考えられる。この〈濫觴説〉は『神代巻私見聞』にみられるもので、最澄・空海が入唐将来した印明を嵯峨天皇に授けたところ、日本に伝わる「神書ノ印明」と寸分たがわぬものであったので、天皇からも最澄・空海に印明を授けた、という相互灌頂の伝承である。『日本書紀聞書』によれば、天神―地神―人皇と相承してきた「日本紀」（と「神書ノ印明」）は、卜部平野家の神主により代々の天皇に伝授され、また両部神道の濫觴ともなった。そのような神典「日本紀」を伊勢祭主・平野神主の両流が相伝しているという説が流布することで、「日本紀の家」の権威が確立されていったのである。第二章では『麗気記』について考察する。同書は撰者すら明らかではなく、その成立に関しては様々な見解が主張されてきた。本著では、撰者として仮託される人物ごとに、醍醐天皇伝授説、役行者・空海・最澄・醍醐天皇共編説、醍醐天皇詔勅・浄蔵撰述説、聖徳太子勅撰説、弘法大師空海説の五説を取りあげ、神典「麗気記」の幻影に迫ろうとする。仮託される撰者は、早くには醍醐説や共編説が有力であったが、徐々に空海説に収斂されていき、近世以降には〈仮託〉された《偽書》と認知されていく。これは同書が版行され一般に流通するようになったことと表裏の関係であることが指摘される。第三章では、臨済僧の中巌円月（一三〇〇～一三七五）が「日本紀」を撰述・奏進したが、皇祖が呉太伯（泰伯）の後裔であるとする〈呉太伯後裔説〉が含まれていたため〝焚書〟されたという伝承を検討する。中巌「日本紀」は後に桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）らによって再評価されるが、日本人が漢字のよみとして呉音に習熟している理由として〈呉太伯後裔説〉を持ち出していることが興味深い。同書は近世以降、是非・賛否の坩堝のなかで否定されていくが、それは中世の言説や学問のあり方を透視させてくれる幻の「日本紀」であった。第四章は、中世神道関連の九つの文献の〈佚文〉を輯集し、簡潔な覚書を添付した構成となっている（評者の私見では、行基に仮託された『太宗秘府』は度会家行・北畠親房・慈遍らの思想形成にも少なからぬ影響を及ぼしており、注目に値する）。著者は、それら〈佚文〉の多くが〈類聚〉という営為のなかで共有されるようになり、また過半が〈仮託〉の体裁をとっていることを指摘し、これらの〈佚文〉が後代の〈註釈〉によって再生されていくものであると論じる。

第Ⅲ部第二編では、〈中世日本紀〉研究の主題のひとつである神器論、とくに宝剣をめぐる言説の諸相と展開について考察する。第一章は、『神道集』の「熱田大明神事」に録される源太夫・紀太夫説話の受容に関する考証である。この説話は日本武尊の東征神話の中世的変容ともいえるものだが、後代に受容されていくなかで新たな熱田鎮座縁起として再編成され、さらに縁起譚から神器論に変容を遂げていくことが指摘される。第二章は、宝剣・草薙剣の行方にまつわる議論である。『日本書紀』天智紀を起源とする〈新羅沙門道行譚〉の受容を手がかりに、宝剣神話の変容と展開を追跡する。新羅僧・道行による草

薙釵の略奪未遂は、中世には〈宝釵説話〉や〈三韓征討譚〉と関連しながら様々なバリエーションで受容されたが、なかには道行を聖人として扱う『熱田宮秘釈見聞』のような例もみられるのである。

第Ⅳ部の第一編は、神代紀註釈の所説から思想史的主題、とくに神道論と仏神論を析出して論じたものである。第一章では良遍の神代紀註釈に焦点を当てる。『日本書紀聞書』における「神道」という語の用法に関する考証をもとに、中世の文脈のなかでの「神道」の適用範囲に注目しつつ、良遍が説く「只有ノ任（ただありのまま）」なる神道の意味を明らかにしていく。良遍は自身の所伝を三宝院流の正統な神道であると認識しており、神典「日本紀」「麗気記」を相承することに重大な意義を見出していた。ここに、師伝を受けたか否かで正統と異義・異説とを区別する流派意識も発生していたことが指摘される。第二章では、良遍の『日本書紀聞書』『神代巻私見聞』を構造的に解析してゆくなかで、「本地垂迹（仏本神迹）思想」から「反本地垂迹（神本仏迹）思想」へとうつりゆく時代思潮の基層をなす問題を扱う。良遍は、天台本覚門で重視された「上冥下契」等の思想により、仏教の三身説と日本の神祇の分類とを対応させ、法身―本覚神（天照大神・伊勢）、報身―始覚神（諸権現・熊野）、応身―実迷神（実冥神）の三神説を提唱した。天台教学に立脚し、「報身―始覚神」を基軸とした仏神論は、本覚（法性）神としての天照大神のあり方を強調する他の三神説（あるいは二神説）とは異なった位相を持つことが指摘される。

第Ⅳ部第二編では、神代紀とその註釈にうかがえる時間論・年代論について考察し、中世における〈当時（いま）〉意識を探りながら、神代紀註釈を中世の思想史と学問圏の文脈のなかに措定していこうとする。第一章では、良遍・聖冏らの論を検討することで、彼らにとっての〈当時（いま）〉は神代の〈古（いにしえ）〉とどのように連携するかを明らかにする。中世仏教の学匠たちは、天地開闢・天孫降臨以来の日本神話を、仏教の〈四劫観〉のなかへ位置づけようと試みた。そこでは、人の寿命すなわち〈人寿〉が漸減していく日本の歴史が、四劫のうち住劫の「第一減劫」なのか、それとも「第九減劫」に当たるのかが議論となったが、良遍は神代紀における地神各代の治世年数と〈人寿〉の整合性から、前者の「第一減劫」説を採った。そのような〈古（いにしえ）〉と〈当時（いま）〉は、一切衆生の「心」という回路によって共鳴し、重なり合い、一体化する。そのことを体験するのが〈神祇灌頂〉の儀礼空間であることが示唆される。第二章では、前章の〈人寿〉の思想に関する議論に深い影響を及ぼした『周易命期経』を解析する。同経に言及した桃源瑞仙・月舟寿契ら五山僧のみならず、清原宣賢・山科言経らの儒学者、宗長らの連歌師などの言説を追うことで、室町期の思想文化圏の地平の広がりを知ることができるのである。

三

中世に形成された神代紀註釈は、〈伝授〉と〈講釈〉という表裏的な営為を通じて形成され、家学として継承されてきた。さらに神代紀註釈は、後代にそれを手にした者の価値判断や利用基準にしたがって伝領・書承されることで、様々に文献的性質や位相を変えながら再生していったことが、本研究で示されている。それは、正確性・不変性を重んじる現代の〝つけられた〟註釈にはみられない現象であり、ここに中世という時代に〝つくられた〟註釈の特質が見出せるのである。

著者は、中世の神代紀註釈が不断に更新された――あるいは変容を余儀なくされた――背景には、中世特有の神典認識が胚胎していたからであるという。〈嵯峨天皇日本紀再治説〉や〈両部神道濫觴説〉などの諸説を基盤として神典が成立していたことは、本著の第Ⅲ部で論じられたとおりである。中世人は近代以降に創出された〈神道史〉の枠組みには収まりえない「神道」論を展開し、〈神代〉と〈当時（いま）〉の連続的共時性のなかで、自身の寿命のありようを見据えていた。第Ⅳ部で論じられたように、そうした思想表現として神代紀註釈を捉えなおすとき、従来の〈神道史〉の視点からはみえてこなかった中世の思想史的環境が立ち現れてくるのである。

そもそも〈中世日本紀〉という概念は、中世における日本紀とりわけ神代紀をめぐる註釈や言説群の諸相と展開を掌握する一視角として提唱されてきた。この方法論の最大の成果のひとつは、研究対象となるべき資料の範囲を拡大し、新資料の調査・発掘の原動力となったことである。従前の学説史では低く評価されてきた中世の神代紀註釈をすくいあげ再評価の機運をもたらし、学界の一領域まで引きあげた意義は大きい。また、近代以降に確立された文学・思想・歴史といった研究分野の壁を越え、諸領域を際限なく連環させていったという点で、〈中世日本紀〉研究のもつ有効性は十分に発揮されたといえる。既成の〈神道史〉の解体・再構築が提唱されて久しい現況にあって、文献面のみならず動態的側面や思想論におよぶまで、神代紀註釈はいまひとたび評価されてしかるべきである、と著者は主張する。

しかし、大きな成果を上げる過程で〈中世日本紀〉は徐々に肥大し、些か衒学的な装いを持つようになったことが指摘される。その有用性に依存するあまり、方法論そのものが問いなおされることは少なく、また〈中世日本紀〉の範疇に含まれる諸相を網羅して体系的に論じられる機会もなかった。著者は、新資料の発掘・紹介に重点が置かれる一方で、既知・既存資料に対する目配りが欠けはじめ、〈中世日本紀〉をとりまく実態的動向や思想史的文脈が見えにくくなっていると批判する。また、個々の言説の差異やその位相の差、ひいては神代紀そのものに対する視点を曇らせた憾みもあるという。本著はそうした状況を見据え、神代紀註釈文献という具現化した資料に立脚するこ

とで、思想史的見地から〈中世日本紀〉研究の再検証を企図したものである。

〈中世日本紀〉にみられる神話の変容と新生の諸相にみられるのは、大胆なまでの神格の置換や密教的解釈、さらには神話モチーフじたいの大幅な改編である。「記紀神話」を正統とする立場からみた場合、〈中世日本紀〉の世界は荒唐無稽なものであろう。中世末期に「記紀神話」と〈中世日本紀〉の間で揺り戻しが兆し、近世の両部神道批判を経て近代に「古代神話」が確立して以降、現在でもその学説史においては〈中世日本紀〉に対する否定的見解が強い、と著者はいう。想起・喚起・連想といったアナロジーに満ちた〈中世日本紀〉の世界にひとたび実証性を求めれば、破綻をきたすことは必至である。しかし、中世という時代にそれが指向され享受されつづけてきた歴史までも不問に附すことはできない。その言説世界をひらき、思想史的再評価をくだすには、「中世の論理」の発見・理解が最大の課題となる。そのアプローチとして必要なのは、実証学的合理性や論理性とは別の次元において、〈中世日本紀〉の内実に対峙し、中世の思考方法のありのままの相を読み解いてゆくことだ、と著者は主張する。中世という時代層のなかで変容と新生を続けてきた〈中世日本紀〉こそ、「中世」の時代思潮と精神世界を投影した思想史的産物に他ならないからである。その中核となった秘書『日本書紀』『麗気記』は、中世末期から近世にかけて開版され流通していくことで、その神秘性を失っていく。ここに〈中世日本紀〉の時代史的な限界が示されるのである。

「あとがき」によれば、本著は著者がこれまで積み重ねてきた二十六篇の論文を総合したものである。そのため些か統一感に欠ける印象も受けるが、著者もそのことは十分に理解しているようだ。もとより〈中世日本紀〉研究は単一あるいは少数のテクストを分析するだけでは成立しえない。そのような茫洋とした研究対象を多角的に捉えてゆこうとする著者の視野の広がりが、時に雑駁なように感じられたとしても、本著の価値を毀損することにはならないだろう。何より、各章で考察に用いられる膨大な文献資料が本研究に高い実証性を付与している。また、附篇「〈中世日本紀〉関連年譜」をはじめ文中に示される諸表は、『日本書紀』ほか諸文献の書写・伝授・講釈などの関係が詳細にまとめられたもので、大いに斯学研究の便に資するものである。ここに幅広い資料を渉猟・翻刻・註釈してきた著者の面目があらわれていると評すべきだろう。

（学習院大学非常勤講師）